



2004●VOL.2192

6月1日(火曜日)

[毎月1日・10日・20日発行]

「自己細胞移植で心疾患治療を」

信大・循環器病再生医学講座

信大大学院医学研究科に4月に設置された「循環器病再生医学講座」(大塚製薬が寄附)は、虚血性心疾患などの循環器病の再生治療を目標に、先端基礎医学を臨床応用につなげる「ブリッジ」を担う。研究の柱である骨髄細胞移植と遺伝子導入による血管再生治療は、すでに臨床応用の準備が整っており、県内の病院にパンフレットを配布しアピールを行っている。

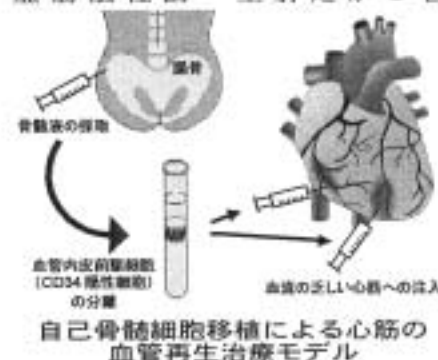
遺伝子療法も体制整う



池田宇一教授

同講座の池田宇一教授(教授併任)は、天野純教授(臓器発生制御医学講座 教授(心臓血管外科))主導のグループで昨年11月、バージャー病患者に対して自己骨髄移植による四肢の血管再生療法を成功させた。その後4例を行

ったがいずれも切断を回避でき、「経過は非常に良好」(池田教授)だ。この治療法は、自己骨髄の中から血管に分化する幹細胞(血管内皮前駆細胞)を分離、血液が流れなくなった四肢に筋肉注射し、血管を再生する。



血性心疾患に応用させることだ。従来のバイパス手術やカテーテル治療との併用によるハイブリッド療法、従来の治療が全くできない場合の単独での応用の2パターンを想定しており、開胸・筋注のほかカテーテルで心筋に直接送ることも可能だ。注入する幹細胞は四

肢の場合よりさらに血管分化能の高い「CD34陽性細胞」を使い、「不整脈などの副作用が出ない自信がある」という。すでに2月末、医倫理委員会が承認している。

このほか同講座は、心臓血管外科が始めた遺伝子導入による血管再生治療にも参画する。閉塞性動脈硬化症に対し、HG

F(肝細胞増殖因子)を筋注し、血管新生を促す。骨髄細胞移植では全麻下で骨髄液を採取するため高齢者などへの適応ではリスクが高いが、遺伝子導入では外来での筋注もできるようになる。池田

教授は「より患者にやさしい治療が可能。3月に治療審査委員会からブラセオを対照とした治験の承認を得ており、症例があればいつでも実施できる」と意欲を見せている。

池田教授は4月に附属病院循環器内科科長にも就任。外来診療にあたっており、「基礎から臨床まで一貫したことができる素晴らしい環境ができた。これを利用して先端治療の普及に努めたい」と話している。